

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：32641

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2014

課題番号：23652146

研究課題名(和文) 英語学習における英語らしさの追求 事態把握の志向性に基づくライティング教育の提案

研究課題名(英文) A Cognitive Approach to Developing English Writing Proficiency Based on Event Construal

研究代表者

谷 みゆき (Tani, Miyuki)

中央大学・法学部・准教授

研究者番号：50440201

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：日本語を母語とする英語学習者が「英語らしい」英語を書くための教育的アプローチを提案することを目的に、言語学的理論を英語教育の領域で指摘されてきた諸問題に適用することを試みた。具体的には、英語らしさを欠いていると考えられる英語には日本語話者が志向する「主観的事態把握」の影響が見られること、また客観的事態把握を促すために1人称代名詞の過剰使用を是正するような指導を行うと一定の効果が得られることが分かった。さらに、研究期間を通して学習者の語彙力の低さが大きな課題であることが分かった。

研究成果の概要(英文)：This research aims to investigate a cognitive approach to teaching English writing to Japanese learners of English. Linguistic theories and issues concerning the teaching of English in a non-native context were explored and discussed in order to improve Japanese learners' English writing proficiency.

This research concludes that one of the major factors related to Japanese learners' low proficiency in English writing is described by influences from their event construal. The findings show a cognitive approach to instructing learners to reduce the use of first person pronouns has some effect on promoting more objective event recognition, and thus improving English writing proficiency. The outcomes during the research period also indicates the underlying issues concerning the learner's proficiency is mainly to do with their level of vocabulary use and lack of collocational knowledge, which needs to be properly acknowledged and addressed in the teaching of English to Japanese learners.

研究分野：英語学

キーワード：英語教育 言語学 事態把握 ライティング

1. 研究開始当初の背景

(1) 学術的背景

本研究は、言語学の領域で主張されている事態把握に関する理論を、これまでに英語教育や第二言語習得の分野で蓄積されてきた英語学習者が言語習得時に抱える諸問題の考察に適用し、英語教育において新規性の高いアプローチを提案する目的で始まった。

言語の相対性に主眼を置いた過去の研究の中で、言語はすべて「好まれる言い廻し (fashions of speaking)」を持つということが論じられてきた。我々の思考は母語とする言語のパターンに影響を受けており、同じ状況を述べるにあたって言語化の方法が異なる。話者は状況を言語化する際、当該状況を把握し、概念化した上で言語化するが、このプロセスの中で最終的な言語化の違いを引き起こすのは、状況をいかに把握するかによるところが大きいと近年の言語学は結論づけている。

池上 (2006) は英語と日本語の比較に基づいて、日本語話者は言語化の対象となる事態に対して「主観的把握」を行う傾向が強いのに対し、英語話者は「客観的把握」を行う傾向が強いと論じている。日本語では概念化の主体が状況に対して自らの身を内に置くことによって主観的に関与し、状況を実際に目撃しているかのように把握する傾向にあるとされ、一方で英語話者は自らを状況の外に位置づけ、客観的に把握する傾向にあると捉えられている。

このような言語学における学術的蓄積を、英語教育ならびに第二言語習得に適用し、より学際的なアプローチによる「英語らしい英語」の習得に効果的な方法論の構築を目指した。

<引用文献>

- ① 池上 嘉彦、NHK ブックス、英語の感覚・日本語の感覚—<ことばの意味>のしくみ、2006

(2) 問題設定

各言語話者が状況をいかに把握するかの違いは、通常、言語話者には意識されない。そのため、本研究では、外国語習得の過程で起きる言語転移や干渉、中間言語の化石化等について着目し、①母語で好まれる事態把握がその話者の第二言語の質に影響を与えている、②第二言語で好まれる事態把握の習得が難しいために生じている、という2点の根源的な問題設定を行い、その実証と問題の克服を試みた。

英語教育への適用という点に関しては、日本語話者に特徴的な誤用のリストを作成・紹介したり、英語らしい表現と日本語に影響を受けた表現を示したりすることで注意を促すといった対処療法ではなく、上で述べた「日本語らしさ」「英語らしさ」の背後にある「事態把握」という根源的な部分に関する

知見を、英語学習者・教育者と共有することを目的とした。具体的には、英語学習者の「英語らしい」英語を可能にするライティング教授方法を提案することを目指した。

2. 研究の目的

本研究は、①日英両言語における「事態把握」の志向性の違いについて新たな言語学的知見を得、その違いが日本の英語学習者の英語にどのような影響を与えているかを実証的に明らかにすること。②①で述べた言語学的知見の英語教育への応用の可能性を探り、日本の英語学習者が「英語らしい」英文を書く力を身につけるためのライティング教育方法および教育教材を提案することの2つを目的に実施した。

3. 研究の方法

本研究では、日英両言語話者の「事態把握」の志向性に関する新たな知見を得ることと、その英語教育への応用の可能性を探ることを目的とし、演繹的アプローチと帰納的アプローチによる研究を並行して実施するべく、各アプローチについてそれぞれワーキンググループを設けて分析を行った。演繹的アプローチでは、認知言語学の理論を用いて、日本語母語話者に特徴的な英語表現の分析や、日英語の表現の違いの考察を行った。帰納的アプローチにおいては、日本語を母語とする大学生のライティングデータを収集し、それを量的・質的に分析することで、共通点や傾向を明らかにした。

(1) 認知言語学的分析 (演繹的アプローチ)

人間がある事態を言語化する際には、話者がその事態をどの視点からどのように把握するのかということが、言語表現に反映されていると認知言語学の分野では考えられている。この両言語の事態把握の特徴を分析するために以下の3種類のデータを用いて、両言語の好まれる事態把握と言語表現を分析した。

①日本語母語話者による英文分析

平成23・24年度に、学習者向け参考書に掲載されているcommon error (日本語母語話者に典型的に見られる誤り) と授業内収集したデータの2種類を使用し、日本語母語話者に特徴的な英文が「主観的事態把握」に起因したものであると考えることができるか考察した。

②文学作品とその翻訳の比較分析

平成24年度には、同じ出来事を英語話者と日本語話者が異なる視点から状況を把握し、描いていることを示すために、英語の小説 (Holes) とその日本語訳 (『穴』) を比較した。翻訳をデータとした理由は、もし日本語話者が主観的に事態を把握する傾向があるのなら、客観的な視点から描かれた英語の移動表現を日本語に翻訳する際に影響があると考えられるからである。

③日英スポーツ実況中継の比較分析

平成25年度から26年度にわたり、人間とボールが常に移動し続けているサッカーの実況中継を使用し、日本語と英語の表現方法を比較分析した。サッカーは様々な試合が世界各地で通訳や翻訳を介さずに多言語で放送されており、同一の出来事を日英語話者がどのように表現をするのかを分析し、事態把握の傾向性との関係を考察した。

(2) コーパス、アンケート分析 (帰納的アプローチ)

①学習者コーパスの作成

平成23年度から25年度にわたり、研究代表者・分担者が担当する英語クラスで、ライティング課題を出し、日本語を母語とする学生のライティングデータを収集した。トピックの統一は行ったが、各担当者の授業実施方法や教室環境に相違があったため、語数や辞書の使用可否などの条件の統一は行わなかった。収集したデータをコーパス化し、学習者コーパスを構築した。

②学習者コーパスの分析

上記で構築した学習者コーパスの分析にあたり、語彙レベル判定には、大学英語協会(JACET)語彙8000リスト、外部コーパスとして、The International Corpus Network of Asian Learners of English (ICNALE)、分析ツールとして The Constituent Likelihood Automatic Word-tagging System (CLAWS7 Tagset) と AntConc を用いた。これらを用いた分析により、学習者英語の語彙レベル、共起表現における特徴、品詞における志向性、などを明らかにし、さらにネイティブスピーカーコーパスとの比較を通じて、日本語母語話者である学習者の英語と英語母語話者の英語の相違における特徴的な点を示すことを試みた。

③学習者アンケートの分析

上記のライティングデータ収集の対象となった学生の一部に対し、質問紙によるアンケート調査を実施した。アンケートでは、5段階のリッカート尺度を使った質問と自由記述式の質問を併用し、英語で文章を書くことの難易に関する回答を収集した。その後、自由記述の部分を対象とした質的調査法による分析を行った。具体的には、各記述からキーワード抽出を行い、それをさらに項目別に分類し、学生が「英語で文章を書く」にあたり意識していることを明確にすることを試みた。

4. 研究成果

(1) 平成23年度

①日本語話者の「主観的事態把握」および英語話者の「客観的事態把握」の傾向性を指摘した先行研究を発展させるため、英語と日本語の「移動表現」の構造的違いに着眼し、その違いが両言語話者の事態把握の傾向性に起

因するものであること考察した。

②高校生向け学習参考書に掲載されている誤った英語表現例 (common error) を以下の4つの文法項目に分けて整理し、それぞれを日本語話者の「主観的事態把握」を反映したものと説明できることを明らかにした(表1)。

表1 Common Error*の例と類型化

項目	誤	正
Thereの誤用	I want to go to Hokkaido.	I want to go to Hokkaido.
	There is beautiful and cool in summer.	It is beautiful and cool in summer.
一人称代名詞Iの過剰使用	I mention the problem of money.	There is the problem of money.
	I think I want to live in a big house.	I want to live in a big house.
知覚の主体(perceiver)を主語に持つ文の使用	My weight has recently gained.	I have recently gained weight.
	To read about the match in the paper was also enjoyable.	I also enjoyed reading about the match in the paper.
動詞の誤用	He met an accident this morning.	He had an accident this morning.
	I met the rain the day before yesterday.	I was / got caught in the rain the day before yesterday.

*Common errorはネイティブスピーカーが通常使用しない不自然な表現を含む

(2) 平成24年度

①平成23年度の「移動表現」に関する考察をさらなる実証的なものとするため、英語で書かれた小説とその日本語訳を比較することにより、両言語話者の事態把握の現れについてさらなる考察を行った。両言語の差異は様々な箇所で見られたが、例えば英語で客観的に俯瞰的な視点から描かれている出来事が日本語に訳される際には「～てくる」という直示的な表現や「えいっ」などの間投詞が使用され、出来事が客観的な視点ではなく、登場人物の視点から主観的に描かれていることが明らかになった。

②平成23年度に収集した約150人分のライティングデータを用い、日本の英語学習者による関係代名詞の多用傾向とその根源的要因について分析した(表2)。

表2 関係代名詞の使用

(1および2は学習者による英文、1'および2'はネイティブスピーカーによる英文)

タイプ	例	要因
述部における関係代名詞句の使用	1. I knew [sic] now she is really a person who has strong belief. 1'. I know now she is really a person with a strong belief.	時制、相が示される表現を志向
SVCの文で、主部における関係代名詞句の使用	2. The person I respect the most is my mother. 2'. I respect my mother the most.	主題化の志向

(3) 平成 25 年度

①約 100 人分のライティングデータを収集し、同時に、一部の学生を対象に、英語ライティングアンケート（質問紙）を実施した。平成 23 年度のデータとともにデータベース化し、それを学習者コーパスとして、使用語彙・品詞・共起表現に関する傾向を分析・考察した。その結果、学習者コーパスの使用語彙の 80% は JACET1000 レベル（中学レベル）であり、大学一般教養レベルとされている JACET4000、JACET5000 レベルの語彙使用は、それぞれ 1%にも満たないことが明らかになった（表 3）。また、学習者のライティングには代名詞 I、冠詞 the、前置詞 to、of、in が高頻度で使用されていることが明らかになり（表 4）、このことは日本語話者の英語に関する多くの先行研究の知見を裏付ける結果となった。さらに、共起表現分析を通じ、学習者の語彙選択が、ライティング課題の際に使用したプロンプトの影響を受けていることが明らかになった（表 5-7）。

表 3 JACET8000 準拠語彙頻度表

語彙レベル	頻度 (type)	割合 (%)	頻度 (token)	割合 (%)
JACET 1000	848	28.68	36,445	83.28
JACET 2000	496	16.77	2,030	4.64
JACET 3000	270	9.13	876	2.00
JACET 4000	133	4.50	334	0.76
JACET 5000	103	3.48	287	0.66

JACET 6000	89	3.01	213	0.49
JACET 7000	64	2.16	146	0.33
JACET 8000	52	1.76	100	0.23
その他	902	30.50	3,332	7.61
合計	2,957	100%	43,763	100%

表 4 学習者コーパス語彙

順位	頻度	語
1	1,607	i
2	1,281	to
3	1,103	is
4	1,017	the
5	1,001	a
6	943	and
7	756	in
8	672	of
9	664	for
10	518	it

表 5 2 語共起頻度 表 6 3 語共起頻度
(太字はプロンプトで使用されている表現)

順位	頻度	2 語共起	順位	頻度	3 語共起
1	203	cell phone	1	74	i want to
2	202	it is	2	70	a lot of
3	150	i think	3	70	part time job
4	147	i respect	4	57	cell phone is
5	134	there are	5	47	i think that
6	129	for example	6	47	i went to
7	123	cell phones	7	43	when i was
8	122	i was	8	34	i prefer to
9	121	is very	9	31	a slower pace
10	118	want to	10	30	a cell phone

表 7 4 語共起頻度
(太字はプロンプトで使用されている表現)

順位	頻度	4 語共起
1	26	part time job is
2	24	there are three reasons

3	21	life at a slower
4	20	a part time job
5	20	at a slower pace
6	16	i prefer to take
7	16	when i was a
8	15	cell phone is very
9	15	live life at a
10	14	time job is good

これらの分析結果から、日本語話者学習者の傾向として、語彙力が低く、比較的容易な単語や見慣れた定型表現に依存していることを考察できた。

②平成 23・24 年度の「移動表現」に関する考察を、サッカー中継で用いられる表現についても検証を行った。英語と日本語の実況中継（データは 2 試合合計 187 分）において使用された移動動詞の統計は以下のとおりである（表 8・9）。

表 8 日本語と英語の移動動詞の使用回数

	様態動詞	経路動詞	直示動詞	合計
英語	142	97	123	378
日本語	56	276	228	654

表 9 日本語と英語の直示動詞の使用回数
（慣用表現や移動に関係ない表現は統計に含まない）

来る	行く	come	go
151	77	46	56

特徴的な点として挙げられるのは、日本語における直示動詞「来る」と「行く」の使用頻度が英語よりも多い点である。日本語の「来る」という動詞は直示的中心である自分の領域に向かって何か移動してくることを表現する動詞であるが、実況中継では話者から遠ざかる移動に関しても「来る」という動詞が頻繁に使用されている。この点からも日本語は視点がピッチ上におかれ、直示的中心を移動させながら主観的に移動事態を描いていることがわかる。英語でもこれらの直示動詞を使用することもあるが、後の分析により英語ではリプレイの映像でモニター画面がクローズアップされている（つまり、映像により視点の移動が促されている）時に come の使用頻度が高いことや選手交代などで選手がピッチ上に移動する際などの視点の移動が促される場面で使用される傾向が強いことが明らかになった。この点からも英語では事態を客観的視点から俯瞰的に描いた表現が好まれると言える結論づけた。

(4) 平成 26 年度

①平成 25 年度に収集したライティングデー

タの一部から、ライティングプロンプトが統一されているライティングデータで学習者サブコーパス（NNS）を構築し、使用語彙・品詞・キーワード・頻度分析などを行った。さらに外部のネイティブコーパス（NS1・NS2）との比較・対照を行い、学習者ライティングの傾向性を明らかにした（表 10）。

表 10 品詞使用とその頻度（学習者コーパス NNS とネイティブコーパスの比較）

品詞	NNS		NS1		NS2	
	語数	比率 (%)	語数	比率 (%)	語数	比率 (%)
名詞	7,004	28%	5,298	23%	4,765	21%
動詞	5,788	23%	4,891	22%	5,000	22%
代名詞	2,179	9%	1,753	8%	1,676	7%
前置詞	2,358	9%	2,085	9%	2,181	10%
副詞	1,364	5%	1,560	7%	1,769	8%
形容詞	1,758	7%	1,335	6%	1,440	6%
冠詞	1,392	5%	1,525	7%	1,326	6%
接続詞	1,357	5%	1,722	8%	1,891	8%
その他	3,192	13%	2,685	12%	2,682	12%

先行研究で指摘されてきた日本語母語話者の代名詞 I や I think の過剰使用について、それらの語や表現を使用しないように指導した結果、使用頻度が低くなったことが分かった（表 11）。適切な指導により、特定の表現の使用が抑制できることが明らかになった。

表 11 I/I think 使用頻度

	NNS	NS1	NS2
I	319	550	417
I think	91	120	36

さらに、上記の学習者によるアンケート回答（平成 25 年度に収集、表 12）を用いて、キーワード抽出やコード化を行い、学習者の英語ライティングに対する認識についての知見を深めた。この分析から、書くという行為自体や英語そのものに対して苦手意識を感じている学習者も少なくないことがわかったが、英語ライティングが難しいと感じている記述がほとんどであり、その要因などについての具体的記述がみられないことが多か

った。従って、日本語と英語の差異をより具体的に意識させ、さらにその差異を埋める具体的な解決方法を提示する必要性が明らかとなった。

表 12 自由回答欄コメント例

アンケート質問	学生コメント例
特に英語で表現するのが難しかったことやその理由について、説明してください。	日本語で考えた文章が英語で表現できず、自分でできる安易な表現に直したことで、全体としての文章の論理がちぐはぐになり、本当に意味が通じているのかが自分自身では確認できない点が厳しかった。
ライティングの授業について、英語力、モチベーション等の観点から、自由に感想を述べてください。	高校よりもきちっとしたスタイルで英語の文章を書くことが学べて良かったです。
「英語で」ライティングをする際に難しいと思う理由、簡単だと思う理由を書いて下さい。	文法体系が日本語と全く異なるから。

②日本語と英語のサッカー実況中継におけるアナウンサーと解説者の相互行為を分析した。日本語話者は目の前で行われている出来事を主観的に把握すると同時に、自身のおかれている状況や相互行為を行っている相手との関係を認識しながら適切な言語表現を選択しコミュニケーションを行っていることを示した。この点から日本語話者の視点は英語話者のそれとは異なり、自らがおかれているコンテキストや社会的状況に埋没した形で、共在する他者との関係を常に認識しながら言語表現が選択されていることが伺える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

- ① 阿久津純恵、青木敦子、谷みゆき、日本語を母語とする大学生英語学習者の英語ライティングにみられる傾向の分析—学習者コーパスと記述式アンケートを用いた一考察、言語文化研究(桜美林大学)、査読有、第6号、2015、1-15
- ② 多々良直弘、スポーツ実況中継のコミュニケーションスタイル—実況中継の相互行為に現れる社会文化的価値観とその再生産—、言語文化研究(桜美林大学)、査読有、第6号、2015、67-83

③ 多々良直弘、好まれる事態把握と移動表現—実況中継における移動表現と視点に関する一考察—、言語文化研究(桜美林大学)、査読有、第5号、2014、21-35

④ 阿久津純恵、青木敦子、日本語を母語とする大学生英語学習者の英語ライティングにみられる傾向の分析—語彙と共起表現に関する一考察、言語文化研究(桜美林大学)、査読有、第5号、2014、37-49

〔学会発表〕(計4件)

- ① Sumie Akutsu and Atsuko Aoki. *Corpus-based Feedback on Japanese University Students' English Writing*. 2015 CamTESOL. Phnom Penh, Cambodia. March 1, 2015.
- ② Sumie Akutsu, Atsuko Aoki, and Miyuki Tani. *The Overuse of Relative Pronouns by Japanese English Learners: How Event-Construal Affects Language Learning*. 2012 Pan-Korea English Teachers Association International Conference. Busan, ROK. October 20, 2012.
- ③ Miyuki Tani and Naohiro Tataru. *The Motion-Event Constructions and Event Construals of English and Japanese Speakers*. The 4th UK Cognitive Linguistics Conference. London, UK. 12 July, 2012.
- ④ Miyuki Tani, Atsuko Aoki, and Sumie Akutsu. *The "Fashions of Construal" of Japanese English learners: An observation on their common error*. International Pragmatics Association 12th Annual Conference. Manchester, UK. July 5, 2011.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷 みゆき (TANI, Miyuki)
中央大学・法学部・准教授
研究者番号：50440201

(2) 研究分担者

青木 敦子 (AOKI, Atsuko)
聖心女子大学・文学部・非常勤講師
研究者番号：70440203

阿久津 純恵 (AKUTSU, Sumie)
桜美林大学・言語学系・講師
研究者番号：20460024

多々良 直弘 (TATARA, Naohiro)
桜美林大学・言語学系・准教授
研究者番号：80383529
(平成24年より研究分担者)